

〈福本さんの戦争体験〉

私は佐世保市栄町（現在の佐世保玉屋付近）で生まれ3歳まで住んでいました。佐世保大空襲（1945年6月29日）前に、早岐の伯父の家へ疎開しました。疎開した早岐で夜中に空襲警報が鳴り、起こされ、防空壕に逃げるために服を着せられた暗闇の出来事をうっすら覚えています。

1945年8月9日、長崎に原爆が落ち、多くの死者と被災者が出ましたが、被災され傷を負われた方々が汽車に乗って早岐にも避難して来られました。最近になって、当時のことを同級生に話したら、お父さんが国鉄で列車の機関士をしておられ、長崎から早岐まで被爆者を運んだ経験があるとのことでした。長崎から早岐に運ばれた被爆者は、早岐国民学校（現在の早岐小学校）に搬送されました。母は介護するために早岐国民学校へ出かけました。その場のことについて母はほとんど話してくれませんでした。

早岐に“徳丸”という墓地があります。そこには、原爆で早岐国民学校に避難してこれ快方することなく亡くなられた被爆者のお墓があると聞きました。しかし、2020年の夏に捜すことができませんでした。

千五は、田舎の方（崎岡町方面）にお米を買い出しに母と歩いて行っていました。早岐に疎開する時、持ってきた母の着物とお米や芋を物々交換し配給だけでは足りない食物を補っていました。しかし、白ごはんは特別な時だけ食べており、普段は麦ごはん、おやつは芋ばかりの日々でした。

（※被爆直後の長崎市に駆けつけ、原爆によって負傷した人々を手当てのために市外に運んだ列車は「救護列車」と呼ばれています。救護列車は4本走り、およそ3,500人の負傷者を諫早、大村、川棚、早岐などに運んでいます）

〈早岐の徳丸墓地（陣の内町）にあった長崎原爆犠牲者之墓〉

佐世保市の早岐駅でも、原爆投下の翌10日以降、多くの被爆者が降ろされ手当てを受けたとされています。当時、警防団の分団幹部として早岐で被爆者の救護活動に携わっていた杉竹茂雄さんが、亡くなった身元が分からない9名の被爆者のことを想い、杉竹家の墓地に埋葬し供養されました。のちに「遺族に代わって弔いたい」と市長に大事を頼んで1953年に建てられたものです。その後、同家の家系が途絶えたため1994年、お孫さんにあたる初瀬和敏さんが佐世保市八幡町にある西方寺の初瀬家の墓地に移され供養を続けています。

〈福本昭代さんレポート〉

福本さんは、今でも世界では争い事が起きていることを憂い、「戦争のない世の中にしないといけない」と、そのような世界になることを願い、今回寄稿してくださいました。そして、「戦争になると当たり前の生活ができなくなる。そのことを子どもたちに伝えたい。長崎市その他、佐世保市早岐にも原爆の史実があることを伝えることで、身近に感じてもらえるのではないのでしょうか」と平和への想いも語られました。